

ロンドン雑感

オーストラリアから帰国して3年後、今度はロンドンへ赴任することになった。オーストラリアのゆっくりした生活リズムからトーキョーの慌ただしい生活リズムへようやく体が慣れてきた矢先のことだった。今までの例を見ると1度海外へ出た者が2度目に又海外へ出るのは早くて6-7年先のことであったので、今回の人事は意外と言うより予想外のことであった。

私はこの異動の打診を受けたとき、気が進まなかった。何故なら私にお鉢が回ってきたのは、所管官庁からロンドンに出向している所長と次長（私の前任者）の反りが合わず、その次長の後釜に私が見込まれたと聞いたからであった。所長はあくが強く、前任地で「部下をノイローゼにし、休職に追い込んだ人物」との風評が私に流れてきた。また家内がこの8月に第2子の出産を控えていたので、子供が生まれてもすぐ海外へ連れて行く訳にも行かず、1年位は単身で海外生活を送らなければならなくなることもいっそう気を重くした。当時の私の心境を再現すれば、(ニッポンの生活にもようやく落ち着いて慣れてきたし、第2子もまもなく生まれる、家も購入したばかりだったので、苦勞の多い海外生活など行きたくない)となる。

傍目には華やかに見える欧州の一等国への赴任が、実際は貧乏くじを引かされたことに気づくのにそう時間はかからなかった。さて、そんな事情で単身赴任したロンドンは6月初旬、1年でもっとも気候の安定した時期に入る頃であった。

シドニーで洗礼を受けたためであろうか。ロンドン生活で違和感はほとんど感じられなかった。もともとオーストラリアはイギリスからの流刑の移民が造った国である。シドニー市内にはイギリス縁の地名が随所に残っていたし（例えばシテイにあるハイドパークとか）、いわば本家本元に戻ってきたような感じである。

赴任後1か月間は、ベーカー・ストリートとヨーク・ストリートの交差点からヨーク・ストリート側に2軒入ったところにあるゲストハウスに滞在して、週末は家探しに費やした。ちなみにベーカー・ストリートは、コナン・ドイルが描いた名探偵シャーロック・ホームズの舞台となったところである。

着いた翌日から早速、アンダーグラウンド（地下鉄）を利用して通勤する。地下鉄ベーカー・ストリートからノーザン・ラインでボンド・ストリートまで行き、そこでセントラル・ラインに乗り換えてオックスフォード・サーカスまで行き地上に出る。そこからはリージェント・ストリート沿いに10分ほど歩いて職場に着いた。

帰路は、ロンドンの街に早く慣れるため、歩いてゲストハウスまで帰ってみた。さすがは多国籍の国である。街は欧米系はもちろんのこと、中国人が多いのはどこへ行っても同じだが、中近東系やアフリカ系、インド系の人の姿も目につく。さながら世界中の人種のるつぼの観がある。

リージェント・ストリートは東京で言えば銀座のような所である。バーバリーやローラアッシュレイなどのブランドショップや銀行の建物などが屏風の壁のようにずらりとピカデリー・サーカスまで立ち並び、その間を名物の赤い色をした2階建てバスや黒塗りのムスタング型タクシーが縫うように所狭しと走り回っている。

ところで、このタクシーの運転手になるには、難しい地理や歴史の試験をパスしなければならぬと聞いた。そのため、どんなに分かりづらい場所を指示しても、きちんと連れて行ってくれると評判である。私もロンドン時代は何度もタクシーを利用したが、1度たりとも間違いはなかった。

シドニー赴任のとき、最初に感じた感覚は「快適さ」であったが、ロンドンに着いてすぐ感じたことは「慌ただしさ」だった。それはトーキョーにいたときと似た感覚、ストレスの多い都会の生活を予感させるものであった。

ところでロンドン生活で私が面白いと思ったものにアンダーグラウンド（地下鉄）がある。アメリカでは地下鉄を **Subway** と呼ぶが、イギリスでは **Underground** と呼ぶ。イギリスで **Subway** というと、地下道を意味してしまう。ちなみに **Sub** は下を表す接頭語で、例えば **Sub-marine** と言えば **Marine**(海)の下、つまり潜水艦を意味する。余談だが。

さて、この地下鉄、チケットを買って自動改札を通り、迷路のような通路をくねくね曲がりながら、ようやくホームへ出るのである。通路は狭い穴蔵のようなトンネルの中に縦横無尽に張り巡らされていて、まるで蟻の巣の中を通っているような感覚に囚われる。少し圧迫感もある。ロンドンに初めて来た人はまず戸惑うものと思われる。ホームは狭く、電車の内部もトーキョーのそれに比べると狭く、汚い。その形状から、チューブと呼ばれている。

地下鉄の種類はセントラルライン、メトロポリタン・ライン、ジュビリー・ライン、ノーザン・ライン、サークル・ライン、ディストリクト・ライン、ビクトリア・ライン、ベイカールー・ライン、ピカデリー・ラインなど豊富である。電車がホームに止まり、ドアが開くと、「**Mind the gap!**」(ホームと電車の隙間に気をつけて!)という構内アナウンスがどこへ行っても必ず流れる。一つ、不思議に思ったのは、朝のラッシュ時、チューブの中は空いていて、奥へ詰めればまだ人がいっぱい乗れるのに何故かドア付近のスペースに

しか乗らず、それ以上、奥へ詰めないのである。ホームで待っている人々もそのことに対して別に不満を言うわけでもなく、当たり前のような顔をして、その電車を見送り、次の電車が来るのを待っているのである。余り過度に人と接近するのを嫌がっているように見受けられる。人との距離をある程度保っておきたいのだろうと自分勝手に解釈した。

この地下鉄が乗り越し清算が利かず、乗り越しをすると10ポンドのペナルティを課されるという事実を知ったとき、(融通が利かないな。)と思った。実際、サービスが悪いことで有名である。

地下鉄の話が続けよう。この地下鉄、私が在勤中、帰宅のラッシュアワー時に地上から切符売り場に降りる階段の入り口を、何の前触れもなく、いきなり全て閉鎖してしまったことが何度かあった。

何でも構内で不審物が発見されたとかで、安全が確保されるまでシャッターが開かず、1時間近く地上で大勢の帰宅の途につく人々が待ちぼうけを食らったことがある。地下鉄が時間通りに来ることはまれで、また時々、駅を1つ飛ばして運転したりする。そして、しょっちゅうストライキを起す。

ある年のストライキの当日、セントラル・ラインのウエスト・アクトンに住んでいた私は、たまたまホワイト・シテイ駅(国営放送BBCの最寄り駅)まで臨時列車が走るようになったので、ホワイト・シテイまで臨時列車で行き、そこからバスで街の中心部へ出ようと試みたが、来るバス、来るバス満員でいつまで経っても乗車できなかった。バスを諦め、ホワイト・シテイから事務所のあるリージェント・ストリートまで歩くことにした。途中、壮重な建物で名高い自然史博物館や映画「ノッティング・ヒルの恋人」で有名なノッティング・ヒルゲート駅、ランカスター・ゲート駅と地下鉄駅に沿って歩き、広大なハイド・パークの横を通りながら、オックスフォード・ストリートをマーブル・アーチ駅、ボンド・ストリート駅と歩き、会社の最寄り駅であるオックス・フォード・サーカスに着いたのは家を出てから3時間後、お昼近くになっていた。

ベーカー・ストリートのゲストハウスに滞在しながら、週末は住居探しに費やしたことは前述したが、家探しといっても、広いロンドン、どこでも良い訳ではなく、1年後に妻と2人の子供が渡英することを考えて日本人学校から歩いて通学できるエリアに限定された。

地下鉄セントラル・ラインでオックスフォード・サーカスから約20分西へ行ったところにあるウエスト・アクトンという駅が最寄り駅だった。小さな駅で、外に出るとインド人が経営するニュース・エージェンツが2軒、酒屋が一軒、日系の不動産屋が一軒、クリーニング屋が1軒、それに「あたりや」という名の日本食料品店と薬局位しかなかった。

駅を出て右方向に歩いていくと、すぐプリンセス・ガーデンと呼ばれる住宅エリアに入る。このエリアに建っている住宅は全て、チューダー王朝スタイルと呼ばれるイギリス伝統の建築様式で、白い壁に黒い格子の入った、日本でもお馴染みの英国風建物であった。市内では北部のゴルダース・グリーン地区（ユダヤ人が多く住むエリア。休日ともなると黒い帽子に黒い服を着たユダヤ人が大勢教会へ向かう姿をよく目撃した）とここウエスト・アクトン地区しか見られない貴重なものらしく、その中の何軒かを不動産屋の案内で見て回ったが、どれも古くて、似たように思われたので、深く考えることなく、その中の1つに決めてしまった。（子供の通学の関係で住居エリアは初めから限定されている。日本人も多いのでまあどこでも大差ないだろう）と何とも大雑把な考えで早々に家探しを終了した。

この家が不良物件だったとはその時知る由もなかった。シドニーでもそうだったが、家探しはつくづく難しいものであると思う。その土地に慣れないうちは、頭の中に何の知識も比較するものもないから、大体変なものを掴まされてしまうのだ。もっともウエスト・アクトン地区以外にもスイス・コテージやビートルズのアビー・ロードのアルバムの表紙の舞台となったセント・ジョーンズウッドのマンションも参考ながら見てみた。緑の多いセントジョーンズ・ウッドの物件はグランドフロア（日本で言うところの1階）にクラークが常駐しており、今から思えば、単身赴任の1年間位はこうした物件に住んでも良かったのではないかと思われる。後の祭りであるが。

あるとき日本大使館でレセプションがあり、参加したことがあった。参加者同士で談笑していると、突然、木槌をたたく大きな音がしたので、音のした方向を振り向くと、壇上で一人の大柄な日本人が、お世辞にもあまり上手いとは言えぬ、しかし実に堂々と、会場全体に響き渡るような厳かな声で「レディーズ アンド ジェントルマン！」と挨拶した。その人が奥克彦さんだった。イラクで凶弾に倒れたあの奥大使である。初対面時から外務省にはいない泥臭いタイプの間人だと感じていた。奥さんの悲報を知ったのは、私が日本に帰国後、しばらく経ってからのことであった。

さて、家も決まり、ベーカー・ストリートの仮住まいからウエスト・アクトンに引っ越してしまうと、途端に時間を持て余し気味となった。賑やかなベーカー・ストリートの仮住まいにいたときは気づかなかったが、静かなウエスト・アクトンに引っ越してからは、異国の地で一人で生活するということが何とも味気ないものであると感じるようになった。

仕方がないので、何かをしようと思ひ立ち、下手な英語力を少しでもアップさせるべく、語学学校に通うことに決めた。7月のある週末、ノーザンラインのゴルダース・グリーン

駅近くにある英語学校の門をたたいた。今更、大人数の教室も何なので、家庭教師を頼むことにした。まずはレベル・チェックの筆記テストを受ける。結果は **inter-mediate**(中級レベル)であった。この結果は、既に英語圏の海外駐在を経験している者からしてみれば、かなり憂慮すべきことだった。思うに英会話力の出来不出来は、その人が話し好きか、寡黙かといった要素でだいぶ違って来るようである。寡黙な人は、日本語であれ、英語であれ、やはり寡黙であって、言語が変わったからといって突然饒舌になるといった話は聞かない。当然、話好きの人の方が日本語でも英語でもボキャブラリー(語彙力)は増えると思われる。私は、無口なので、英会話の上達は期待できないと自覚している。

さて、そうこうしていると、担当のチューターが決まった。ケンブリッジを出た才媛でお父上はジャーナリスト、お母上は大学で人類学を教えているというアカデミックな家庭に育った人だった。

彼女は、ロンドンのイースト・エンド(東の外れ)に住んでいて、毎週2回、平日の夜、西の外れのウエスト・アクトンにある私の自宅まで来てくれた。最初の1、2回こそ気合を入れて、先生の講義を聞いていたが、だんだん熱意が薄れてきて、しまいには時々さぼるようになった。どうにかこうにか半年位続けたものの、彼女の方も冬休みに1か月以上の長期休暇を取って旅行に行くというので、それを潮に止めてしまった。

ウエスト・アクトンの家に引っ越したちょうど同じ時期に中古のドイツ車を購入した。これで週末、ちょくちょく郊外ドライブに出かけるようになった。

手始めに、ウインザーにあるウインザー城へ出かけた。自宅から、**Hanger Lane** を通って、**M4**に入る。ちなみに**M**とは**Motor way**の略で高速道路を指す。以前、別のエッセイでも書いたが、イギリスの高速道路はどこまで行こうがただである。あとはひたすら**M4**を西へ向かって車を走らせる。途中、進行方向左手にヒースロー空港の国内線、国際線、貨物ターミナルの誘導標識を見やって、郊外環状線である**M25**を通り過ぎると、道の左右にのどかな田園風景が広がってくるようになる。しばらく行くと、左手の方角の森の中にウインザー城が見えてくる。城の屋上に旗が立っていれば、城の主、すなわちエリザベス女王が現在、滞在していることを示している。今日は旗が立っていないので、女王は不在のようだ。**Winsor Castle**の案内標識板に従って、**M4**を降り、ウインザー市内へ向かう。

余談だが、イギリスの道路標識、観光案内標識は実に分かりやすい。特に観光案内標識は、通常青色のボードの道路標識と区別する意味もあって、茶色のボードに名所・旧跡名が大きく白地で書かれており、おまけにその名所、旧跡を表す絵まで描かれているのだから間違えようがない。イギリスで私が感心したものの一つである。

城は市内を睥睨するかのよう丘の上に立っている。城を真上に見上げることのできる

公共駐車場で車を止め、城まで上り坂を歩く。

ところで、駐車場ではまず券売機で駐車時間を自分で指定した切符を購入し、その切符（シールになっており、裏面が剥がせる）を車のフロントガラスの内側に貼っておくのである。この作業をしておかないと **Warden** に駐車違反の紙を貼られてしまうのだ。1回 80ポンド(約1万6千円)の罰金は安くない。駐車違反で思い出したが、所用でロンドン市内に車で出かけ、目的の場所に駐車スペースがないという場面によく出くわした。そんなとき、(ほんの数分だから)と道路の脇に車を止め、その場を離れると一発でやられる。どこからともなく **warden**(警察から委託された駐車違反を取り締まる役目の人)がやってきて違反のシールを貼られてしまう。これはもう私がロンドン在勤中、100%、ただ一つの例外なくやられた。ある意味、舌を巻くほど感心したシステムの一つである。日本の駐車違反取り締まりはここまで徹底されていない。余談であるが。

城入り口へ続く沿道にはマクドナルドなどのファースト・フード店や土産物屋、レストランなどが軒を連ね、世界中からやって来る観光客で賑わっている。

城の正面入り口には、お馴染みの赤い制服に黒い縦長の帽子を被った衛兵が微動だにせず立っている。本当に微動だにせず立っているのだ！まるで人形のように！

城内の建物内部や庭は自由に見学できるようになっている。建物内部の絢爛豪華な部屋や壁に飾ってある大きな絵画もさることながら、庭からはウインザー市周辺が一望でき、気持ちの良い場所であった。

その次の週末は、オックスフォードに出かけてみた。ロンドンから 100 キロ程度北西に位置する世界的な名門大学オックスフォード大学のある町である。

自宅からは、**Hanger Lane** を通って **A40** に入る。途中から **M40** に乗り入れ、あとは、ひたすらオックスフォードを目指す。道の左右には、のどかな広々とした田園風景が広がっている。よく本などで目にするイギリスの典型的な田園風景とはこのようなところを言うのであろう。

M40 を降り、オックスフォードの町に入ってくると、「**Park & Ride**」という標識を目にするようになる。これは、世界的な観光地でもあるオックスフォードが、大勢の観光客で混雑する町の中心部への車の乗り入れを規制して、町の中心部から離れた場所にマイカーを止めさせて、そこからバスで市内へ向かわせるというシステムである。日本でも最近、鎌倉や飛騨高山などでこのシステムを取り入れているようである。

とは言え、初めてオックスフォードを訪れたときは、そんなことはお構いなく、車で町の中心部まで無頓着にも行って見た。